

ふるさと創生・人口減少調査特別委員会会議記録

ふるさと創生・人口減少調査特別委員会委員長 佐々木 朋和

- 1 日時
平成 28 年 9 月 1 日（木曜日）
午前 10 時 1 分開会、午前 11 時 27 分散会
- 2 場所
第 1 委員会室
- 3 出席委員
佐々木朋和委員長、川村伸浩副委員長、高橋元委員、阿部盛重委員、工藤勝子委員、
岩崎友一委員、福井せいじ委員、飯澤匡委員、工藤大輔委員、五日市王委員、
斉藤信委員、小西和子委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
大山担当書記、中村担当書記
- 6 説明のため出席した者
青森県企画政策部企画調整課 基本計画推進グループ
20 代を変える「生き方ナビ」事業担当
総括主幹 田澤謙吾氏
主査 鷹幸弘康氏
- 7 一般傍聴者
なし
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
地方での生活に優位性を見出す仕組みについて
～20 代を変える「生き方ナビ」事業～
 - (2) その他
次回の委員会運営等について
- 9 議事の内容

○佐々木朋和委員長 ただいまからふるさと創生・人口減少調査特別委員会を開会いたします。

委員会を開きます前に、当特別委員会の担当書記に異動がありましたので、新任の書記を紹介したいと思います。よろしく願いいたします。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付しております日程のとおり、「地

方での生活に優位性を見出す仕組みについて～20代を変える「生き方ナビ」事業～」について調査を行いたいと思います。

本日は、講師として青森県企画政策部企画調整課総括主幹、田澤謙吾様並びに主査、鷹幸弘康様をお招きしておりますので、御紹介いたします。

○**田澤謙吾講師** どうもおはようございます。青森県庁企画調整課の田澤と申します。こちらが鷹幸になります。本日は、このような機会を設けていただきまして、大変ありがとうございます。

私ども青森県に限らず地方県におきましては、この人口減少というのが最大の課題だというふうに思っております。手をかえ品をかえ、我々もいろいろやっていますが、なかなか減少に歯どめがかからないという状況でございまして、岩手県さんも、このような特別委員会を設置されているということは、近い状況なのかなというふうに推察をいたします。

きょうは、我々の事業を御紹介いたしますが、必ずしもうまくいっているものばかりではございません。ですので、それほど参考になるかどうかというのはわかりませんが、同じ地方県として幾らかでも御参考にさせていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○**佐々木朋和委員長** ありがとうございます。

田澤様並びに鷹幸様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、「地方での生活に優位性を見出す仕組みについて～20代を変える「生き方ナビ」事業～」と題しまして、青森県で実施されている県外転出者数が最も多い20代の方が地元での生活に優位性を見出せる仕組みづくりについてお話をいただくこととしております。

田澤様並びに鷹幸様におかれましては、御多忙のところ、また先ほどお話もありましたけれども、台風の対応というところもある中お越しいただき、御講演を引き受けいただきまして、まことにありがとうございます。心から感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくこととしておりますが、後ほど田澤様並びに鷹幸様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、田澤様並びに鷹幸様、よろしく願いいたします。

○**鷹幸弘康講師** それでは、早速私ども現在取り組んでおります事業について御説明させていただきます。

地方での生活に優位性を見出す仕組みについて、20代を変える「生き方ナビ」事業。まずは、本県の人口減少の状況について概要をざっと御説明したいと思います。

青森県の人口ですが、平成27年度現在130万人余り、これを30年前、昭和58年と比べますと、約22万人の減少となっております。こちらは、今の岩手県の人口で見ますと、およそ一関市と奥州市の人口を合計した人口に相当するものです。22万人が30年間で減少してしまったという状況にあります。

この要因としましては、青い線をごらんいただきますと、人口は減少の一途をたどって

いるという状況にあります。この内訳としまして自然減と社会減、上の赤い部分が自然減、水色の部分が社会減を示しております。平成10年までは自然増があったのですが、平成10年以降、出生のほうは自然減となりまして、社会増減とあわせまして、平成8年あたりから人口は常に減っているという状況になります。

まず、この社会増減に着目して、昨年度、平成26年10月から1年間の転入者、転出者の年齢別の内訳を見てみますと、18歳と22歳でおよそ転出者の約半分を占める状況になっています。18歳は高校卒業時に大学に進学する際、22歳というのは大学卒業時に県外に就職される方が多くを占めており、トータル6,278人のうちその約半分の2,971人を18歳と22歳で占めているという状況にあります。

こういった状況から、青森県において若者が流出するとどういった影響があるかということをお簡単に御説明しますと、まずは経済成長に及ぼす影響が大きいところです。2点目としては社会保障に及ぼす影響があります。青森県では、長期人口ビジョンを昨年度策定しまして、2080年以降、人口が約80万人で安定、27年度130万人でしたので、およそ50万人さらに減少したところで安定させましょうということで現在取り組んでおります。

しかし、この場合でも県全体に占める高齢人口、65歳以上の方の割合は当面上昇し続けます。この高齢人口の割合というのが実は2040年、これから24年後にピークを迎えるということになっております。私が今41歳で、ちょうど65歳になる年齢です。年金を受給できる年になっているのですが、今の状況からいくと、そういう年金ももらえるかどうか、あとは私は子供が3人いるのですが、自分の子供への負担がかなりのしかかってくるのだらうなということも考えるところがありまして、改めて人口減少対策の必要性を実感しているところであります。

影響の3点目としては、企業活動に及ぼす影響があります。生産力の低下、消費者の減少に伴う市場の縮小などです。

さらに4点目、地域に及ぼす影響としまして地域の伝統的な行事、イベントなどの消滅が懸念されております。この点につきましては、私の母校の小学校が今年度いっぱい閉校になるということが決まっております。当時私がいたときも同じクラスは10人程度の学校ではあったのですが、それが今年度いっぱい閉校になるということで、私自身もそうですが、私の親も含めて地元に残っている者がこの地域に元気がなくなってしまうということを実感しております。

次に、5点目ですけれども、さらなる人口減少への負のスパイラルということで、たとえば出生率が改善されたとしても、結婚、出産適齢期の男性、女性が減少しておりますので、生まれてくる子供の絶対数が減少しております。これによってさらに人口減少の負のスパイラルがかかってしまうということが懸念されます。そして、何よりも地域に元気がなくなってしまうということが大きな問題であります。

そこで、青森県は、県の基本計画としまして、未来を変える挑戦、2030年における青森県の目指す姿というものを基本方針としてまとめました。この中で青森県は、人口減少対

策を最大の課題として取り組んでおります。

取り組みの柱として、主に雇用の創出、拡大に取り組んでおりますが、今後の成長分野であるアグリ、ライフ、グリーンと観光関連産業の振興などに取り組んでおります。

こういった取り組みというのは、若者の定着といっても働く場所がないのではないかという話にどうしてもなってしまいますので、そういった環境の整備にも取り組んでおります。一方で、若者自身が地元に残りたいとか、地元に戻ってきたいという意識自体がなければ片手落ちになってしまいますので、雇用の場の確保といった環境の整備プラス若い方の意識の醸成という取り組みを私どもでやっているところです。

まずは、この若者の意識を変えることができないか。あともう一点、若者の皆様が 30代になったところに後悔してほしくないなという思いでこの事業を始めております。皆様思い当たるところがあると思いますけれども、20代のころにもっと勉強しておけばよかったとか、あのときあの仕事をやめないで続けておけばよかったとか、あのとき今の奥さんと結婚しなければよかったとかそういう方もいらっしゃると思いますけれども、別な言い方をすると、もっと早く結婚して子供をもう一人授かりたかったなというお考えもできると思います。

私の場合は、大学進学時に県外に出ました。部活に熱中し、就職活動を一切せずに卒業してしまいまして、2年間フリーターを経験しました。私が県外に行った理由というのが、青森県には何もないと。田舎だし、コンビニエンスストアも当時はなかった。県外に出れば何かあるはずだと思って出ました。でも、結局行って見て何もなかったなど、地元青森に帰ってきました。何もないと思っていた青森ですが、仕事を通じていろんな人とつながりを持つほど、どんどんおもしろくなっていきました。これは、つまり何もないのではなくて、あるけれども、ただ知らなかっただけということを私自身実感しております。

こういった思いで始めた私どもの事業なのですけれども、人生を決めるような出来事の80%は35歳までに起こるというように、アメリカの臨床心理学者の方がおっしゃっています。ここにおられる方々を見たところ、既に8割方人生がお決まりになってしまっているのかもしれないですけれども、まだまだ20%ありますので、まだ大丈夫だと思います。

20代は、まさに離陸をしたばかりの飛行機のようなものだと、この方はおっしゃっております。少し方角を変更しただけで、花巻空港から飛び立っても、ちょっと変えるだけで大阪に行くかもしれないですし、福岡に行くかもしれない。まだ20代でちょっと変わるだけで、その後の人生が大きく変わるのだということをおっしゃっていました。

私もこのメグ・ジェイさんの言葉に触発されてこの事業を知事に提案しました。庁内ベンチャー事業という制度があり、これをやりたいという職員がいれば知事に提案をして、知事がいいよと言えば、予算と人を張りつけてもらえるという事業です。その制度で20代を変える「生き方ナビ」事業を昨年度から2年間で取り組ませていただいております。

この事業の大きな目的は二つ。青森県で働くことの価値を見出してもらおう。これは、さっき言ったように、ただ知らないだけというようなことがありますので、そういったこと

がないように、まずは知ってもらおうという取り組み。あとは、結婚や子育てまでを見据えたライフプランを早い時期に考えてもらうという目的。二つの目的を持って実施しております。

具体的な事業の内容を、引き続き御説明いたします。

○田澤謙吾講師 では、引き続き事業内容につきまして、私から御説明をいたします。

この事業は、生き方を変えるというようなことがメインテーマとなっております。知事が気に入って、やれやれとおっしゃっていただいたのはいいものの、じゃあ、どうやったら変えてもらえるのだろうかというのは過去に例のないような事業だったものですから、非常に手探り状態で始めました。とりあえず走りながら考えていこうということで、もともとの予算要求資料には余り書いていないようなことを次々やっております。それが、庁内ベンチャー事業として権限と財源をいただいている我々の事業の特徴でもあります。

柱としては大きく三つに分けて構築しております、一つ目は気づいてもらうこと。生き方考えることが重要だということに気づいていただくというのが一つ目でございます。それから、気づいたことを実際にやってもらおうというのが二つ目でございます。三つ目でございますけれども、こういう事業にかかわっていただく方々というのは、どうしても一部の限られた方々になってしまいますので、それだと広がりがないということで、それを若者の皆様にどうやって広げていくか、情報発信していこうということで進めております。では、順次御説明してまいります。

気づきを促す取り組みの一つ目としてI♡（ラブ）青森トークショーというのをやっております。こちらのページにあるのが一番最初にやったものです。左上の写真に写っている皆さんなのですが、これは青森県のローカルテレビ局、青森朝日放送というテレビ朝日系列のテレビ局の人気番組のキャストの皆さんをお招きして、第1部では結婚とか子育てに関することをテーマにトークを繰り広げていただきました。右側、第2部というのが、これは弘前市でやったときなのですが、地元弘前市でさまざまな活動をしていらっしゃる方に、実際の弘前暮らしってこういう感じだよというのをテーマにお話をいただきました。左下、参加者、こんな感じで、いっぱいいるように写っていますが、実はこれ定員 250 人で考えたのですが、100 人ぐらいしか集まりませんでした。交流会もやって、参加していただいた方には非常に好評だったのですが、ちょっと申し忘れましたけれども、今回のこの 20 代を変える「生き方ナビ」事業のターゲット、20 代でも社会に出てしまった方々をターゲットにするというのはなかなか難しいなど。出てしまった方に生き方をちょっと変えてみろよと言っても、もう就職していたり、住みかをかえていたりということで難しいだろうなということで、社会に出る前の大学生の皆様をメインのターゲットにして繰り広げています。こちら岩手県のほうでも岩手大学さんが中心になってCOC+、地（知）の拠点事業というのをやっているとありますが、青森県も同じように弘前大学が中心となって若者の県内定着に向けた取り組みを進めておりますので、そういうタイアップの意味も兼ねまして、大学生をメインターゲットとして進めてい

ます。

これをやって気づいたのは、結構人気のあるテレビ番組で、割と人気のある方、吉本の芸人さんなんかも東京から毎週来てやっている番組なのですが、これだけのキャストをそろえても250人定員に対して100人しか集まらなかったということで、生き方について学生は全く興味がないということがよくわかりました。御想像のとおり、学生の皆さんの興味ってほぼ就職に絞られておまして、我々が何かしようとしても就職に有利かどうかというのがほぼ判断基準になって、参加していただけるかどうかが決まるというような状況でした。

したがって、今回の一番最初のトークショーというのは何もない土曜日の午後、場所は弘前大学でやったのですが、特に授業ともタイアップせず、本当に集まりたい人だけを集めてやったということになるのですが、これだとなかなか聞いていただけない。要は気づいていただくきっかけを持っていただくことができない。これを青森市と八戸市でもやろうと思っていたのですが、ちょっとうまくいかないなということで、2カ所目以降は大学のキャリア教育の授業とタイアップさせていただいて、無理やり聞いてもらおうという方向に転換しました。

やったのが青森中央学院大学さんと八戸工業大学さんです。こちらのキャリア教育の授業って、特に私立大は、やっぱり就職率というのが大学の学生募集にもかかわってくるものですから、ほぼ必修のような形でやられております。したがって、2年生なり、1、2、3年生の学生さんたちはほぼ聞いていただける環境にあるということで、そういうキャリア教育の授業とタイアップして、一つは生き方を考えていただくということであるとか、あるいは青森県内で活躍している方々のお話を実際に聞いていただくとか、あるいは企業の人事担当の方々の採用におけるポイントなんかを聞いていただくようなことを行いました。

実際に聞いていただくと、こういうことを考えるのも大事なんだなというふうに、事後のアンケート調査等ではいただいていますので、やはり最初興味がなくても何とか聞いてもらう機会をつくるのが非常に大事なのだと感じたところでございます。

続きまして、実践的な取り組みとして考動プロジェクトというものを行っております。この「考動」って当て字なんですけれども、考える、動き出すということを略して当て字で「考動」というふうに字を当てております。気づいた後で実際に動き出さないと変わらないよねということで始めたもので、実際には昨年度、今年度と8月に合宿形式でビジネスプランを考える取り組みを行いました。昨年度は3泊4日、ことしは4泊5日で合宿を行っております。内容としては、青森県内にある地域資源を活用してビジネスプランをつくってみたいと。よくビジネスプランコンテストとかであるのは、プランを提案して終わり。大学生のプランって大体そういうパターンが多いのですが、これは実際に提案していただいたプランを我々行政なり民間がバックアップして実際にやってもらおうということまでフォローするというプロジェクトでございます。合宿を行いまして、昨年度は

3本の提案、今年度は6本の提案がなされました。また、この結果については、後ほど御説明をいたしますけれども、割とおもしろいアイデアが生み出されて実践に移されております。

それから、実践的な取り組みの二つ目でございますけれども、弘前街ナカゼミという街ゼミを開催しております。これは、主に地域で活躍している方々を講師としてゼミのように少人数、十数人ぐらいから、一番多いときで30人ぐらいだったのでございますけれども、講師を囲んでごつくばらんにお話を聞いた後に意見交換をしてもらいましょうという場をつくっております。例えばこの左下の岩渕さんという方ですが、岩手県出身で弘前大学の農学生命科学部に進学して農業関係の大学院まで進まれたのですが、今弘前市でダンススタジオを運営しています。全く関係がない分野ですが、弘前市でストリートダンスに出会い、それをなりわいにしたいということでインキュベーションセンターなどの支援を受けながらダンススタジオを運営し、今はさらに一歩進んで企画プロモーションなんかをなさっていて、ストリートダンスの全国大会を誘致したり、いろんなイベントをやったりということで活躍されている方です。このような方々が講師となつて、では学生時代、自分はどういう生き方をしてきたのか、どういうターニングポイントがあったのか、そういうお話をさせていただくという場にしております。

今何をやっているのかとか、こういう取り組みが成功したというようなプレゼンテーションの機会は多々あると思いますが、これまでどうやって生きてきたのか、あるいはどんな転機があったのかという、人の人生を聞く場というのはなかなかないものですから、今までお話したことがないという講師の皆さんが多数いて、このためにわざわざ昔の資料を掘り起こしていただいたり、昔の写真を掘り起こしていただいたりというような、これまでの生き方を探るようなゼミを行っております。結構好評で、昨年度下期から始めたのですけれども、今月末にもう一回やりまして、月1ペースでやって、今月末で12回、ちょうど1年間やったという形になります。

続きまして、情報発信の取り組みですが、これも昨年度下期から活動が動き出してからの話になります。AOMORI Media Labo. というグループを立ち上げまして、紙とウェブと映像配信という三つのコースで情報発信をしていただいております。先ほど申し上げましたように、情報は幅広い皆さんに届かないと余り意味がないということがありますので、若者目線で同じ世代の方々に情報をお届けするという目的がメインではありますが、もう一つ、これに直接携わっていただいた方にとっては地域を見直すきっかけになると。いろいろ取材を重ねて情報発信していくわけですが、情報発信するためには情報を集めなければいけない。情報というのは、基本的に青森県の魅力であるとか、青森県民の生き方であるとか、そのようなことになりますので、今まで気づけなかった情報にこの学生たちが気づいてくれています。そして、それをこんないい魅力があるんだよという学生ならではの視点で同じ世代に届けていくというようなことをしております。

まず紙媒体です。皆さんのお手元にもお配りしておりますが、Aomorigraff

i t i という小冊子をつくっております。Tokyo graffiti という若者に非常に人気のある雑誌があるのですが、そのTokyo graffiti とタイアップをいたしまして、隔月で実際発売されている雑誌の4ページ分を3回掲載させていただきました。4ページ掛ける3回ですので12ページ分、プラス表紙、裏表紙プラス学生企画ということで、4ページ足してこの16ページ物の冊子をつくりました。

青森県の魅力は何ですかというのをいろんな方々に聞いて、それをフリップに書いて持ってもらおう。今よく見かけますけれども、このTokyo graffiti さんという雑誌が、このフリップスナップを始めた方々ということだそうです。青森県の魅力は何ですかというのを聞いたり、次のページは社長になった青年という企画で、実際に青森県内で起業された方が学生時代にどのような人生を送っていたかというようなことをまとめたもの。その次のページは、先ほどの「青森の魅力は？」というのがありましたけれども、最初のページは学生さん。これは社会人の皆さん、県内、県外の社会人の皆さん。県外の方は、青森県出身の方ということになります。同じことを聞いています。それから、次が職業図鑑というページで、青森県ならではの職業をまとめたものです。リンゴ農家さんだったり、ねぶた師さんだったり、あと県内にはゆるキャラがいますけれども、このりんご飴マンというのは東京都から青森県に移住してきて、今青森県に住んでいる方です。りんご飴といえば、やっぱりリンゴだから青森県だろうと移住してきたのですけれども、実は青森県にはほとんどりんご飴がなかったというそんな落ちもあるのです。

あと、その次のページは同じ青森県の魅力をパパ、ママに聞くという企画。

それから、次がタイムスリップ写真館ということで、同じロケーションで何十年か後に同じモデルの人が写真を撮る。昔の写真を引っ張ってきて、それを同じ人で撮るということです。なので、だっこしていた写真が、もうとでもだっこできないような状況になっていたり、これは弘前城、今曳屋でお城が違う場所に移っているので、お城が写っていないかたりするのですけれども、そんなこともやっております。

最後のページは、これは本誌に載らなかった分ですが、学生企画というギャラリーをつくっています。

この冊子をどこに配ればいだろうというのをいろいろ考えまして、結果的には今年の冬とことしの夏の2回に分けて、県内の成人式で全ての成人に配付いたしました。これで改めて青森県の魅力に気づいていただければいいなど。成人式というのは、地元の方はもちろん、県外に出ていった方も戻ってくる機会ですので、県外に出ていった方に改めて青森県の魅力に気づいていただければいいのかなということで作成しました。これは、今年度も同じように今作業を進めておりまして、もちろん取材なり撮影というのは大学生が、プロの指導を受けながらということになりますけれども、行っております。

基本的に成人式っていろんな資料を配るので、そこで一緒に配っていただいたのですが、左下、青森市だけはそういう配付資料がないということで手配りにいたしました。右下の写真は、実際に配られたものを持って記念写真をしている新成人の皆さんです。

続きまして、WEB媒体コースになります。右下にあるALICEYというサイトはNTTドコモさんのdメニューで若い女性向けに情報発信をするサイトでございます。そちらのほうとタイアップさせていただいて、毎月5本から10本の記事をALICEYに投稿をいたしました。トータルで約6カ月、45本ほど、青森県に関する記事、あるいは恋愛とか出産に関する記事を学生がみずから取材して投稿いたしました。トータルで45万ページビューぐらい、45万人ぐらいの方に見ていただいたということになります。こちら結構地元の方々を取材して、改めて地元の魅力に気づくという場になったと思っております。

続いて、映像配信コースはユーチューブに動画をアップするというものです。ミーティングをして企画書を書き、絵コンテをつくり、学生が撮影、編集まで行って、それをユーチューブにアップするという一連の流れを行っていただきました。これも青森県の魅力ということで、例えば右上の写真はブドウ農家さん取材したものですし、最近、弘前市を中心にリンゴの酒、地酒のように地元で醸造する地シードルをつくっているの、そのシードルを紹介したり、あるいは八戸市のせんべい汁を紹介する動画を制作してユーチューブにアップしております。昨年度はトータル6本の動画を配信し、今年度も同じように動画を制作しているところでございます。

このような形で昨年度からさまざまな取り組みを行ってきたのですが、いろいろな問題があります。I♡(ラブ)青森トークショー、先ほど申し上げましたとおり、最初に平場でやったら全く人が集まらなかった。さっきの写真、結構人がいるように見えたと思うのですが、実際は後ろから見るとこんながらで、250人入るキャバでやったものですから、非常に寂しいなと思ったわけです。こういうところに集まってくれる学生というのは、いわゆる意識が高い方々で、どんな場面でもどんどん飛び込んでくる方々です。確かにこのような方々と一緒にやっていくことによって我々の事業は進んでいくわけですが、どうやって広げていこうかというのがいまだについて回っている課題です。就職しか考えていないいわゆる普通の学生さんには届けにくいなど。届かない限りなかなか我々の趣旨が伝わらないということで、これが我々の中では相変わらず課題になっている。

ただ一方で、先ほども申し上げましたけれども、その他の、以降のキャリア教育等の授業とタイアップしてやったことも含めて、昨年度トータル約600名の方々に御参加いただきました。その6割ぐらいの方々は、トークショーを聞いた後にアンケートを行った結果、青森県で働くイメージができたというふうな回答をいただいております。あるいは生き方について考えることの重要性に気づいたというようなお話もあります。

したがって、やはり気づいていただくことによって考えていただくことにつながるということになると思いますので、こちらについては今年度も同じようにキャリア教育の授業を活用させていただきながら、大学生の皆さんにいろいろ気づいていただきたいというふうなことで進めていく予定でございます。

続きまして、考動プロジェクトの成果でございます。先ほども申し上げましたが、3泊4日の合宿で、今年度もつい先週やりましたが、学生の皆さん、最終日、昨年度で言

えば3日目の夜は全員徹夜でした。今年度はさらに激しくて、2日間ほぼ徹夜でした。当然スタッフもそういう形になっていくのですけれども、そういうプロジェクトをつくることによって、いろいろ気づいていくこともあるのだなということはありません。あと、合宿を通じて横のつながりができてくるというのが非常に大きいのかなというふうに思います。昨年度は三つのグループで、各1本ずつビジネスプランを立案して、皆さんが希望すれば全てのプランをフォローしますよ、ビジネスまで持っていくよというような形にしたのですけれども、1グループはちょっと人数的に少なかったということもあって断念、もう1グループは途中までやったのですけれども、結局断念、最後1グループは実際にプランを施行するところまで行うことができました。それが昨年2月中旬に行った、短命県体験ツアー～青森県がお前をK I L L～という企画でした。これ昨年2月、1月ぐらいにリリースしたのですが、学生が情報発信したツイッターから火がつきまして、まずウェブ上のメディアでかなり拡散して、ウェブのまとめサイトとかそういうところでもかなりニュースになりました。そこから今度はいわゆるマスメディア、新聞ですとかテレビとかに広がりまして、結局トータル30社近くから取材が来ました。このツアーって一体何だろうと、非常にふざけているとか、何だ、これ、だめなんじゃないかと、青森県、御承知のとおり平均寿命全国最下位ということで、それを逆手にとったツアーということで企画されたものです。

なぜ青森県が短命なのかと、これ本当に学生が真面目に考えたものです。なぜ青森県が短命なのかというふうに考えたときに、実は青森県、非常においしいものがある、おいしい海産物があったり、おいしいお酒があったり、ついつい食べ過ぎちゃう、飲み過ぎちゃうというようなことが短命県につながっているのではないかという仮説のもとでこういう企画を立てたのです。あとは、例えば豪雪地帯ということもあって、前の日幾ら飲んで二日酔いになっても、朝は早起きして雪かきしないと仕事に行けない。そんな二日酔いで雪かきなんかすると血圧も高くなってあたちちゃうよねと。そんなこともあって青森県短命なんだよと、要は逆説的に、自虐的なPR手法としてこういうことをやったものです。

弘前駅集合、弘前駅解散というツアーで、学生たちがはじいた金額が2万4,800円、1泊2日。めちゃめちゃな金額設定なのですが、10名募集のところ、定員が埋まりました。そのうち半分ぐらいは首都圏からのマスコミさんの同行取材ということで、お金を払って取材に同行した方々で、週刊文春さんとか女性セブンさんが本当に張りついて一緒に取材されました。テレビにも相当取り上げられて、左下の写真は実際にテレビで紹介された映像ですけれども、学生が企画したものです。

若干内容を御説明しますと、お酒がいっぱい並んでいます、これ酒蔵見学という企画です。見学20分に試飲が1時間半と、そういう企画でした。試飲じゃないというレベルでたっぷり昼から。でも、これ午前10時集合だったので、試飲を始めたのが午前10時半ぐらいなのです。午前10時半からこんな日本酒並べて、大体試飲が終わるころには、もう既にいい感じできているというふうな。これも逆手です。普通試飲っておまけみた

いなものなのですけれども、試飲がメインの酒蔵見学という仕掛けでした。

それから、お昼はラーメンです。青森県、ラーメン大好きな県民でございまして、カップラーメンの消費量が日本一だったりするのですけれども、普通のラーメンも大好き。特に津軽地方には、煮干しラーメンというのがありまして、煮干しラーメンが大好きということで、これ1軒目です。2軒目です。お昼から煮干しラーメン2軒はしごしていただきました。短命県体験ツアーということですので、塩分をとり過ぎるようにつゆは全部飲んでいただく、完吸いしていただくという仕込みです。

もう大体これでおなかいっぱいになって、もう寝たいなと思うのでしょうかけれども、この後、津軽地方の伝統工芸、こぎん刺しという刺し子がありまして、飲んで、食べて、眠くなったところで細かい目の刺し子をやって、さらにストレスをためていただくというような仕掛けになっております。

そんなこんなで夜も例えばお漬物におしょうゆをかけて食べていただく津軽の食べ方とか、あとタラたまという、タラの干物にしょうゆを入れた卵をかけて食べるとか、そんな伝統的な料理を味わっていただき、次の日は朝から雪かきを体験していただくという、かなりハードなツアーを行いました。

ただ、最後に座禅の体験をして、これまでの1泊2日を振り返っていただいて、皆さん、こんな生き方でいいんですかと、ちょっと生き方を反省してみませんかという、一応振り返りの時間を設けて、こういう生き方だと短命になりますよというような仕掛けをいたしました。

もともとこれ、一等最初のターゲットというのが首都圏等のある程度の企業の部長さんクラス。皆さんの生活こうですよと、酒飲んで、ラーメン食って、接待で大変ですよ、朝はでも仕事で早くてみたい、そういう企業の皆さんをターゲットにしてやれば、これ受けるんじゃないというようなところから始めたのです。最終的にはそこまでターゲット絞らずに一般から受け入れたのですが、実際そういう企業の方々ってそれに近い生活をされている方もいるのかなというようなところが発端でございました。

そして、この短命県体験ツアーを企画した学生たち、あるいは考動プロジェクトに参加した学生たちというのは、それをきっかけとして非常に変わってきました。7月にはこの合宿に参加したメンバーが中心となって弘前市に居酒屋をオープンしました。これは、学生のゼミとかではなくて、学生がみずから出資して、お金を出し合って起業したものです。完全に起業です。短命県体験ツアーの打ち上げの場で、学生って社会人との交流がほとんどないよね、学生は学生同士だし、たまに社会人とつながりがあるとしても、バイト先の人しかないよねみたいなお話になって、もっと地元で活躍している社会人の人たちとお話しする場があれば、もっと地元のことを好きになるし、知っていただくきっかけになるのではないかと、そういうハブになるような居酒屋、居酒屋という形式をとっていますけれども、学生と社会人が交流できる場が欲しいよねということをきっかけに居酒屋をオープンしたものです。7月のたしか23日にプレオープンして、今年9月にグランドオープンとい

うことで、今まさにメニューなんかを試行錯誤しながらさまざま取り組んで試してみているところです。ちょうどきのう、NHK青森放送局の取材が入ったものが放送されました、もしかしたら東北全体のニュースでも流れるかもしれないというお話だったので、機会があったら見ていただければと思います。

この真ん中の眼鏡の学生が合宿に参加した子なのですが、老けて見えますが20歳の子です。この子は、宮城県出身で弘前大学に来た子で、弘前市で起業して、基本的にはこのまま続けたいというようなお話をしています。意欲的に今県の商工会関係の補助金に申請して無事に採択されました。これから顧客の皆さんを巻き込んで、例えばこの居酒屋のつくりをどうしましょうかみたいな感じでリノベーションですね、改装を手づくりでやっていこうとか、あるいは当初の目的である学生と社会人の交流ができるようなイベントを仕掛けていくとか、そのようなことでこれから仕込みをしていくというふうになっています。あした我々も参加してまた打ち合わせをする予定にはなっているのですが、こういうふうに意欲的にみずから手を挙げてくる学生が出てきたというのは、非常にありがたいなというふうに思っております。

それから、学生のビジネスプレゼンを先月、8月7日に開催いたしました。即決型のビジネスプレゼン大会ということで、提案企画を4本書いており、弘前市周辺、津軽地方の会社4社の幹部の方々にお集まりいただいて、学生が考えるビジネスプランを提案し、その場で企業の皆さんが採用するかどうかを判断していただくという企画を行いました。具体的には、盛岡市からは撤退しましたが、中三デパートさん、それから弘前経済新聞というウェブ上の新聞屋さん、それから先ほどの学生居酒屋も入っているかだれ横丁という横丁ですね、屋台村さん、それから弘南鉄道という民鉄さん、4社さんに集まっていたきました。学生からの提案を受けて、その場で採用、不採用に手を挙げていただいたのですが、1番目の中三デパートさん以外の三つの案件については全て採用ということになりまして、二つ目の恋愛コンテンツで若者の「いいね」倍増計画というのは、もう実際に企画が動いていて記事化されました。それから、三つ目、四つ目はこれから企業さんと詰めていって具体化を目指すということになっております。

こういうことも、先ほど来申し上げていますが、地元企業を知るきっかけになるとか、あるいは地元、地域資源を知るきっかけになるとか、若者が地域を知るきっかけになるかなど。いずれも若者をターゲットにしていくのがメインの企画となっておりますので、若者が地域に入っていくきっかけになればいいなということもあります。

このようなことも、全然もともと企画していたわけではなくて、先ほどちょっと御説明したAOMORI Media Labo.というもので、たまたま8月7日が各コース、三つのコースで講師の方々が一堂に集結する場になっていたものですから、せっかく三つのコースが集まるので、その講師の方々にアドバイザーとして参画いただく企画が何かできないかという思いつきでやったものですが、結構おもしろい企画になりました。

我々の事業は、こういう思いつきというか、予算の枠内であればいろいろ自由に動ける

というところがありまして、このような企画を年度内、予算が決まった後でも構築できるというところがメリットになっております。

それから、弘前街ナカゼミですけれども、通常こういうのをやると講師の方々に謝金を払うわけですが、これは手弁当でやっていただいております。というのは、地域の社会人の方々もやっぱり学生、若い人たちに地域に残ってもらいたいという思いがすごくあって、だったら手弁当でやるよというような方にお引き受けをいただいているというところです。

これまで11回時点で125名の方が参加していて、事後のアンケートではこういう講師の方々の話を聞いて、働き方であるとか、青森県で暮らすことについて考えるきっかけになったというようなお話をいただいたり、あるいは卒業した後に無職、フリーターになっている人とか、卒業したらどうしよう、どういう人生を送ろうと悩んでいるような方々に聞いてもらいたいというようなアンケート結果をいただいております。

これ、9月で12回になるのですけれども、今年度下期も継続、あるいは我々の事業は基本的に2カ年事業ということで今年度で終了ですが、この事業は講師の手弁当でやっていただいておりますので、来年度以降も民間の方々に事務局を引き継いでいただいで継続できるような今仕掛けをしております。

それから、こちらは、先ほどの繰り返しになりますけれども、A o m o r i g r a f f i t iを作成して、新成人約1万人の方に配付いたしました。これも、もちろん新成人の皆さんからも好評いただいているのですけれども、社会人の方々からも、これ欲しいなという声を結構いただきまして、そういう方々にもお配りしているというところでございます。

その他、A O M O R I M e d i a L a b o . のWEB媒体コース、ウェブコースで記事を書いていた学生さんですが、先ほどのALICEYというサイトやほかのサイトで書いていたときは当然勉強という意味もあり、指導を受けながら特に報酬等はなくやっていたわけですが、4月以降実際に報酬をもらいながらウェブの記事を書くというような取り組みを行っています。あるいはこの彼女が、首都圏のIT企業さんがやっているB I Z C A M Pという企画にタイアップしてやりませんかという話を持ちかけて、この学生が事務局となって今年度は一緒にタイアップして考動プロジェクト合宿というのをやったり、みずから我々サイドに企画を提案して実現させるというような動きをしてくる学生がちらほらふえてきたというのがこういう取り組みをやってきた成果の一つであるのかなというふうに感じております。

それから、今年度つくった動画ですが、今年度は昨年度よりさらに一步踏み込んでいます。昨年度は青森県内の魅力を発信するというようなテーマでしたが、今年度は県が抱える問題から目をそらさずにテーマ設定をしようということで、若者の県外流出をどうやってとめていくかというようなことをテーマに、2本の切り口で動画を制作しました。こちらについては、今年度非常に好評で、県内の成人式であるとか、あるいは首都圏等の移住交流センターのようなどころでも流していただくことを検討しています。時間があればど

っちか1本を後で見ただけだと思います。

それから、学生居酒屋、社会人と学生の交流イベントの提案があったり、あるいは大学生による青森県の魅力発信というような事業を今後も強力に進めていくということになっております。

以上、大体事業の御説明ということになりますけれども、最初に申し上げましたとおり、直接我々の事業にかかわっていただく学生の皆さんというのがどうしても限られている、意識の高い方々ということになっていて、そういう意味では必ずしも我々の取り組みがうまくいっているのかというと、そうではない部分が多いというふうに感じております。ただ、一步一步こうやって実際に目に見える動きが出てきているというのも事実ですし、こういう積極的に動く学生さんたちを見て、周りの学生さんたちが徐々に巻き込まれていけばいいのかなというふうに感じているところでございます。そのあたりをまろもろ考えながら引き続き、あと半年ぐらいあるわけですが、この取り組みに力を入れていきたいなと考えております。

一応ここでシート自体は終わりですので、先ほどの動画をちょっとごらんいただくかなと思います。これキャストの関係で、我々そんなに予算を潤沢に持っているわけではないので、キャストの予算ゼロなのです。そういうこともあって、今御紹介する動画、僕が出ています。5分ぐらいです。

〔動画上映〕

○**田澤謙吾講師** お粗末さまでした。この映像も学生が企画、構成、それから絵コンテも描いています。当初のきっかけが「出戻り」という言葉、あるいは東京から地元に戻ってくるというイメージが悪いよねということを学生たちが感じていて、それを何か別の表現で言いあらわせないかなと。戻ってくることは全然恥ずかしくないんだよ、いいことなんだよということを表現したいということでさまざま考えた結果、こんな動画になりました。プロの方々の指導は受けていますが、その企画、構成から絵コンテから撮影まで全て学生がやりました。編集だけはプロの方をお願いして、こんな仕上がりになっているということになります。動画は後期もつくる予定ですが、これをきっかけに、学生たちが、何が問題なのかというのを気づくきっかけになったと思いますし、そういう意味で非常に効果があったのかなというふうに思います。

若干いただいた時間を超過してしまいましたが、以上で我々の説明といたします。どうもありがとうございました。

〔拍手〕

○**佐々木朋和委員長** 大変貴重なお話、ありがとうございました。

これより質疑、意見交換を行いたいと存じます。ただいまお話をいただきましたことに関し質疑、御意見がありましたら、お願いいたします。

○**福井せいじ委員** 平成 27、28 年度の事業ですけれども、予算と人員をどれくらいかけているのかということをお聞きしたい。

それから、22歳で流出している1,039人、平成26年から、平成27年の9月30日、今回I♡（ラブ）青森トーク600名、それから弘前街ナカゼミで125名とダブる方はいるのでしようけれども、この1,039人という人数は、一人一人話していったら会えるのではないかなど。話して行って、青森の魅力とか、あるいは青森で就職するメリットとかを取り組めるのではないかなというような気がするのですけれども、こういった事業の中で一人一人に会おうなんて思わなかったですか。そういうことをちょっと聞きたいのですけれども。

○田澤謙吾講師 では、まず予算のほうですけれども、ちょっと正確な金額は今持っていないのですけれども、昨年度が3,500万円ぐらい、今年度が2,200万円ぐらいです。結構大きい金額がついています。人員のほうは3名専従です。ただ、ことし残念ながら1人、残念ながらと言うべきなのかはあれなのですけれども、1人育児休業に入りまして、2人でやっています。臨時職員の方はついているのですけれども、ことしは2人でやっています。結構そういう意味では、ことしは大変です。

あと、その1,039人の方々、出ていってしまうとなかなか会えないので、出る予備群の方々とは何らかの機会にお会いする機会というのはあるのかもしれないと思います。結局出ていった先に行かないとなかなかお会いできないので、そうなるとなかなか切ない部分があります。ただ我々としてはより多くの学生に会いたいと思っていますし、実際大学に足を運ぶ機会は非常に多いです。多いときだと、本当に週3回、4回、弘大のほうに行ったりはしています。

○阿部盛重委員 どうもありがとうございました。メインは大学生が対象なのですけれども、高校生まで掘り下げていくというお考えはあるのかということと、それからいずれ企業誘致とか、あとUターンの方々に対しても、やはり帰ってきてもらわないといけないというのがあると思うのですが、そのあたりの対応はどのような形でなさっているかをちょっと教えていただきたいと思います。

○田澤謙吾講師 先ほどのグラフにありましたとおり、一番出ていく人数が多いのが高卒後ということを見ると、高校生まで広げていかなければならないというのは考えとしては持っています。ただ、高校生になりますと教育委員会所管になってしまって、なかなか我々の事業が入っていくというのが現実問題として難しいところがあって、やりたいのだけれども、なかなかやりづらいというのが本音のところでございます。

それから、Uターンであるとか、一度出ていった方については、別な事業でUターンの方々をターゲットに首都圏のほうでグループというかネットワークをつくるということはやっています、そちらのほうにアプローチしていくというのは現在もやっていることです。我々のほうとしても、先ほどの動画であるとか情報発信のツールを使って、そちらのネットワークにも情報を流しておりますので、そういう意味ではそちらのほうにも力は入れていきたいなというふうに考えております。

○阿部盛重委員 なかなか教育委員会はゴーを出さないのですか。

○田澤謙吾講師 教育委員会というのは、はい、なかなか。

○阿部盛重委員 青森県のこと考えれば。

○田澤謙吾講師 そうですね、教育委員会として出してくる事業というのが当然あるわけで、そちらとうまく絡めていくということになると思います。知事部局のほうから教育委員会に何か提案しようとする、大体高い壁があるという感じですが、そこは逆に教育委員会側から出てくる事業とうまく絡めるというほうが多分うまく進められるのかなというふうには思います。

○工藤大輔委員 最近の大学生の授業後の活動というのがどうしているか、ちょっと私もよくわからないのですけれども、私が学生時代であれば、大学であればサークル活動というのがどの大学にも幾つもある、いろんなバリエーションがあってやっていたと思います。岩手県を見ていると、たまに県立大学のほうに行ってみても、学生、学校が終わった後、本当に楽しんでいるのかなと、何をやっているのかなというふうなことを感じて、そこが学生の元気のあるなしにもかかわってきているのかなというふうな思いもしております。

そういった中で、青森県の大学生、そういった状況はどうか、あるいはこういった取り組みをサークルのような形に結びつけて、そうすると継続性が出てきたり、新入の学生なんかを勧誘したりしながら、例えばそういった取り組みが学生にとって将来の就職にメリットあるんだよというふうなイメージづくりができれば、引き続き興味を持って活動する生徒が出てくるのではないのでしょうかというふうに思います。今後の展開として、例えば予算がついているうちはやるのだけれども、予算がつかなくなったときにこういった事業を引き継いでやれる形をどうやっていくか、あるいはそうやって結びつけることによってこの活動が自立したり民間の取り組みにつながったりというふうなことに発展できれば一番いいと思いますが、その辺の考えについて。

○田澤謙吾講師 まず、学生が大学生活を楽しんでいるかどうかというところなのですが、直接我々も全て把握しているわけではないのですけれども、聞くところによると、やはり自宅なりアパートと大学とバイト先のトライアングルで動いて、そのトライアングルから出ない方々は相当数いるというふうには聞いています。

あと、逆にサークル活動とか、あるいは地域活動に参画している学生の皆さんというのは、大抵一つだけではなくて三つも四つも参画している方が多いと感じます。サークルで何かやりつつ、地域活動で何かやりつつ、ボランティアもして、あるいは県の事業にも参画してみたいな子たちが結構な人数います。そういう子たちが我々の事業にも参画してくれている。実際にそういう活動をしている子たちの中で新たに学生団体をつくらせる動きもありますので、そういうところとは引き続き連携してやっていけるのかなと。やはり行政が主体になって動かしていくよりは、学生が主体になって動かしたほうが、例えば情報発信力というのも、学生同士がつながっているラインとかツイッターのSNSの拡散力というのは非常に強いので、そういうようなサークルとは、現在も連携してやってい

る部分がありますし、今後もやっていきたいというふうには思っております。

それから、あと基本我々のベンチャー事業というのは2年で終了ということになるのですけれども、当然2年やって、はい、それまでよということではなくて、来年度以降また、人口減少関係の事業でありますので、同じように人口減少関係の事業の中で我々の事業の後継的な事業というのはぼちぼち仕込みにかかっているような状況です。そこをうまく橋渡しできるように、これから関係部局と調整していくというような計画にしております。

○**工藤大輔委員** 先ほどの映像を見ても、あっ、おもしろいなと率直に思いました。各自治体、市町村等でも地域の広報等を進める中で、どうしても失敗のないといいますか、どこにでもあるような広報スタイルが多い中で、何か各市町村それぞれ特色あるような形でこういった取り組みなんかもあって、そしていんなところで見えるようになれば非常におもしろいなというふうには感じたところです。なかなか行政がやり得ないようなもの、学生の発想、若い発想で地域をPRするものが社会貢献というようなものに結びつき、学生にとっても、視野が広がったり、いい経験だったなというふうな思いが伝わるような事業、これからもやっていただきたいと思います。期待しています。

○**田澤謙吾講師** ありがとうございます。学生の社会貢献につきましては、多分岩手大学さんも同じだと思うのですけれども、今地方大学、文部科学省の方針として地域に貢献することが大学に求められていると思いますので、弘前大学におきましても、かなり学生が地域に出て行って、その地域の方々と一緒に何かするというのがここ数年非常にふえているような気がします。ただ、ゼミ単位とか、授業のためというところ、ある意味そこまでというところもありますので、そこにどう付加価値をつけていくというか、本気で地域に入っていくような学生をふやしていくのかというのは、我々行政サイドも一緒に入ってやっていくことによってうまく回していけるのではないかなと考えております。今いただいたご指摘等を踏まえながら、我々青森県でも進めていきたいなというふうに思います。どうもありがとうございます。

○**飯澤匡委員** きょうのお話を聞いて、今までやってきたいろんな行政施策とは少し目先を変えてやろうというのがこの「生き方ナビ」事業だと思うのですね。ただ、ちょっと潮流に反したようなお話をしますけれども、岩手県、青森県、秋田県というのは農業県で、青森県でもその取り組みとしてはある意味ないということですが、これはやっぱり根幹部分であるので、人口の定着のためには、どうしても産業と直結した人材育成をしていかないといけないと思うのです。

今回は、大学生の方々を中心にして、いろんな情報戦略によっていろんな角度で物を考えていく、地域貢献であったり、それからライフスタイルであったりということで事業としては進められたと思うのですが、先ほど阿部盛重委員からもお話があったように、私も高校の卒業式とかを見ますと、就職先はやはり情報関係であったり、ホワイトカラーの部分の需要もどんどんふえていっているのです、どうしてもそちらのほうに行きがちだと。高校も就職率上げるために一人でも多くとやっていますが、では本当の根幹の産業の事業を

どうやってつくっていくのかというのは非常に難しい問題であり、これはやはり県が主導してやっていかなければならないなど。農業であるとか、第1次産業でどういうふうにしてもうけるのか、そして定住させるのかという非常に重い命題には突き当たっていかねばならないのです。この部分が、岩手県もそうですけれども、一部で成功している部分もあるけれども、兼業でやらざるを得ない部分がどんどんふえているということが大きな問題であって、ここの部分に切り込んでいかないと、恐らく集落、地域というものが成立しなくなってくる。あえてこういうことを投げかけるのも、お互いにわかっていながらのお話ですけれども、ここは非常に大きな問題だなと思っています。

その辺は次の展開ということになるのでしょうかけれども、そこら辺の考え方を示していただきたいと思います。どうしても岩手県から需要のある、仕事先の需要があるところに出ていくというのは避けられない状況でもあるし、親もそれをとめられないという状況はここずっと続いている。ただ、以前よりは大分地元志向は高まってきていますけれども、特に岩手県は震災というものがあって、その受け皿をしっかりしていかなければならないというふうに強く思っているところです。さっきの質問だけ、どういうお考えであるか、お知らせください。

○田澤謙吾講師 まさに、おっしゃるとおりだと思っております、今回の我々の事業というのは、決して人口減少対策の保守本流の事業ではない。あくまでも見方を変え、切り口を変えて行っている事業ということでありまして、当然保守本流の事業というのは、先ほどスライドにもありましたけれども、雇用の創出であるとか、人材育成であるとか、そちらのほうの事業になると思っております。したがって、そちらのほうは当然これまでも力を入れてきたわけですし、今後も力を入れていかなければいけない分野です。それに対して我々の事業が側面支援になるような形が一番いいのかなと思っております。

例えば情報発信で、動画のところでも若干触れましたけれども、Uターンブドウ農家さんというのを取り上げることによって、農業というのは実はこんな格好いい生き方なんだよというのを少しでもわかってもらいたいというような切り口で進めております。あるいは、リンゴ農家、単にリンゴだけだとなかなか厳しいかもしれないけれど、付加価値をつけてシードルをつくっている方もいるんだよということがわかってもらえればいいと。そういうような、まさに人材育成なり産業育成という本流ではないのですけれども、それを若い人たちに少しでも広げていくお手伝いが我々の事業でできればいいのかなというふうに考えております。

あと、最後にありましたけれども、出ていくことは避けられないようなお話、これ我々の青森県でも同じで、また我々の事業でも県外に行くこと自体を否定するつもりはないということでございます。こう言ってしまえば身もふたもないのですけれども、ただ最初に鷹幸からも申し上げましたけれども、地元のことを知らないままで出ていってしまうと、本当に根っこがなくなってしまうと、帰ってくるきっかけを失ってしまうということになってしまうのかなと。なので、出ていくということ自体は、先ほどの動画でもありました

が、スキルアップの場でもあるかもしれませんし、それはそれでいいんだよ。ただ、地元に残ることも選択肢として考えてみませんか。考えた結果、いろいろ地元も調べた結果県外に行くのであれば、それは地元を知って出ていくということになりますので、将来的に根っこは残っている状態です。我々の事業では、選択肢をふやすというのを一応命題にしていまして、県外就職、それはそれでよしと。ただ、10年後にスキルアップして戻ってくることもぜひ考えてくださいねというなたてつけで考えておりましたので、そういう意味では先ほどもありましたけれども、Uターンなりの、一度出ていった方々にも働きかけを強めるということは、これからますます重要になっていくのかなというふうに考えております。

○佐々木朋和委員長 ほかにございませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木朋和委員長 ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたしたいと思います。

田澤様並びに鷹幸様、本日はお忙しいところ、青森県で実施されております20代の方が地元での生活に優位性を見出せる仕組みづくりについて、本県でも参考にできるようないろいろな実例を交えながら、またユーモアを交えながらお話をいただきました。本当にありがとうございました。心から感謝いたします。

〔拍手〕

○佐々木朋和委員長 委員の皆様には、次回の委員会運営等につきまして御相談がありますので、しばしお残りいただきしたいと思います。

次に、1月に予定されております当委員会の調査事項についてであります。御意見等がありますか。

〔「なし、委員長一任」と呼ぶ者あり〕

○佐々木朋和委員長 ありがとうございます。

特に御意見等がなければ当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議はありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木朋和委員長 異議なしと認め、さよう決定いたしました。

次に、来年1月24日火曜日から26日木曜日に予定されております当委員会の全国調査についてであります。お手元に配付しております平成28年度ふるさと創生・人口減少調査特別委員会調査計画（案）のとおり実施することとし、そのほかの調査については当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議はありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木朋和委員長 異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。お疲れさまでした。